

科目：日文作文

系所組：日本語文學系碩士班

次は『AERA』（朝日出版社、2021年、9月7日）に掲載されたお悩み相談の記事（「障害のある娘をどうしたら人々の悪意から守れるのか」（36歳 女性 くじら））で、答えているのは著名な脚本家・舞台演出家の鴻上尚史さんです。読んだ後、以下の質問に答えてください。

A【「障害のある娘をどうしたら人々の悪意から守れるのか」（36歳 女性 くじら）】

鴻上さん、はじめまして。私は現在36歳で、共働きで保育園に通う2人の子供を育てています。我が家の次女は、ダウン症があります。産後すぐは、長女になんて申し訳ないことをしてしまったんだろう、どうしたら妊娠前に時間が戻せるんだろう、などと今思うと最低のことを思ってしまったこともありました。しばらくは次女といっても気持ちに霧がかかったような状態だったものの、次女の可愛さが少しずつそれを晴らしてくれ、今ではこの子じゃなければよかったという気持ちは1%もないと自信を持って言えます。幸い周りの環境にも恵まれ、保育園の先生方や主治医など優しい方々に囲まれて、なにより子供たちの可愛さに救われて（大変さも同じくらいありますが……）楽しく毎日をご過ごしています。

さて、ご相談したいのはこれから次女が成長し、学校、社会に出て行く中で、どうしたら悪意のある人から守れるのか、ということです。というのは最近、ある芸能人が子供時代、障害者を虐めていたことを面白い冗談として話しているニュースを見たからです。このニュースを見てとても悲しく、涙が止まりませんでした。親ができることとしてはとにかく環境をよく考えて選んで、できる限りのことをするしかないのだと思っています。これほどの悪意が世の中にあることを想像したことがなく（電車などでちらちら見られるくらいのことはありましたが）、次女にもいろんな経験をして好きなことを見つけてほしいと考えており、それが子育ての希望にもなっていたため、「そんなことよりも、とにかく安全に過ごせる場所にいさせてあげなくては」と自分が次女を狭い世界に閉じ込めてしまうようになるのでは、ということも不安です。

例えば小学校も、長女も通う予定の地域の小学校で（普通級ではなく支援学級になるとは思いますが）健常の子たちとも関わりながら生活するのが次女の成長にとっても良いのではないかと思います（そしてダウン症児の親としては、ハンディキャップがある子が当然に身近にいる環境で育つことで、周りの子供たちが障害に対してフラットな「いろんな子がいて当然だよ」という意識を持って成長してくれたらいいな……という願いもあり）、入学を希望していましたが、それにも少し不安を感じてしまっています（通う予定の学校について悪い評判を聞いたことはないのですが、大丈夫だろうと頭では思っているのですが）。

大変長文になってしまい申し訳ありません。「子供たち、特に障害のある子をどうしたら悪意から守れるのか」ということについて完全な策はないのではと思うので、それを教えてほしいというわけではないのですが、このような問題について鴻上さんのお考えや、気持ちの持ち方についてアドバイスをいただけたら大変うれしいです。

B【鴻上さんの答え】

くじらさん。暑い日が続いていますが、毎日の子育てはいかがですか？くじらさんが書かれているように、僕も『子供たち、特に障害のある子をどうしたら悪意から守れるのか』ということについて完全な策はないと思っています。とても残念なことです。問題を一気に解決するような万能な策はないでしょう。ただ、「次善の策」はいくつかあると思っています。

そのひとつは、これもくじらさんが書かれている「周りの子供たちが障害に対してフラットな『いろんな子がいて当然だよ』という意識を持って成長して」くれる環境を用意することでしょう。そのためには、「ハンディキャップがある子が当然に身近にいる環境」で、子供だけでなく大人も生活できることですよね。

僕は小学生の時、商店街が主催したツアーに一人で参加しました。祖父母は米穀商を営んでいて、商店街のまとめ役だったのですが、祖父母も両親も参加せずに、何故か僕一人だけが誘われました。たぶん、キャンセルが一人出て、「じゃあ、鴻上さんのところの孫を入れてあげよう」となったんじゃないかと、今となっては想像しています。

他の参加者は、みんな商店街の人達とその友達や関係者でした。旅館に着いて、いきなり、一人の男性に話しかけられました。30歳前後に見えましたが、言葉がはっきりせず、何を言っているのか、よく分かりませんでした。小学生だった僕は身構えて、身体が強張りました。すると、ツアーに参加した人が、その男性に「どうしたの？」と声をかけました。その男性は一生懸命、声をかけた人に話しました。

「ははあ。君はお米屋さんの孫なの？と聞いているよ」と、にっこり笑って、その人は僕に説明してくれました。僕はあらためて、男性の顔を見ました。満面の笑みで、僕にむかってうなづいていました。僕もあわてて、うなづきました。

「よしちゃんの言ってることは分かりにくいんだけど、よく聞けば分かるから」。説明してくれた男性は、あっさりと言いました。部屋は、男達数人の相部屋でした。食事の後、中学生や高校生、そして大人達とよしさんが一緒になってワイワイと話していました。よしさんが必死になって何かを話し、高校生が「よしさん。何言ってるか分かんねーよ」と笑いながら突っ込み、よしさんがその言葉を聞いて大笑いし、大人が「いや、俺は分かる！」と解説し、でもよしさんが「ちがう」と訂正して、会話は続きました。

よしさんと一緒に笑っている人達はみんな、よしさんの知り合いでした。よしさんと会話して、分かったり分からなかったりしながら、突っ込んだり、笑ったり、ムツとしたりするものが日常のようでした。笑いの中には親しさしかありませんでした。バカにするとか、排除するという匂いはまったくありませんでした。なによりも、よしさんと普通に接していることが、小学生の僕には驚きでした。言ってることが分からない時は分からないと言い、はっきりしゃべってない時はもっとはっきりしゃべってと言い、筋が通ってない時はこういうことなの？と確かめる。じつに、普通の会話でした。今から思えば、よしさんは知的障害に分類されるのだと思います。でも、男部屋で一緒に寝た人達は、それが障害ではなく、よしさんの個性として当たり前に関わっていたのです。

それは小学生だった僕には、本当に衝撃的な体験でした。ハンディキャップのある人達に対する接し方が、180度、完全に変わりました。僕の通っていた小学校では、支援学級（昔はこの言葉ではありませんでしたが）がありましたが、どう接していいかわからず、ただ距離を取ったり、先生に言われた義務感から話しかけたりしていました。ですが、僕はこのツアー以降、普通に接するようになりました。距離を取ったり、無理に話しかけるのではなく、目があったり、すれちがったり、空気を感じた時に自然に声をかけました。あのツアーの体験がなかったら、決してそうはならなかったらと思うます。

商店街のツアーは、今からもう50年も前の話で、まだ地域の共同体が健全に機能していたんだと感じます。地域にはさまざまな人達がいる、さまざまな人達がいることが当たり前で、さまざまな人達と共に生きることが当然なんだと、みんなが地域を大切にしていた時代だと思います（それは「世間」が機能していたということで、この強い「世間」から弾き飛ばされるといきなり人々は牙をむくのですが、それはまた別の話です）。

さて、くじらさん。「障害のある子を悪意から守る」ためには、障害があることが特別なことではないと、多くの日本国民が思えることが重要なことだと思います。それは、本当は健全な想像力があれば分かることです。人間を「障害」や「生産性」で切り捨ててしまうことは、自分がそうなる可能性をまったく想像してないということです。

でも、人生は何が起こるか分かりません。病気や事故で以前の「生産性」を失い、「障害」を持つようになる可能性は誰にもあります。自分は絶対にそんなことにならないと断定できる人がいるとしたら、僕には信じられないことですが、今、たまたま自分がそうでないというだけの理由で、「そういった社会的弱者」を切り捨て、悪意をぶつけることは、自分で自分の首を絞めることなのです。率先して自分自身が生き難い世の中を作っているということです。

と書きながら、私達は「当事者にならないと分からない」ことがよくあります。接客業に就いて初めて客の横柄な態度のインパクトに驚いたり、子供を持って初めて親の苦勞が分かったり、リーダーにされて初めて人を指導することの難しさに苦しんだりするのは、でも「当事者にならない限り気持ちが分からない」のでは、いろんなことが手遅れになってしまいます。そのために想像力を使うのですが、それが不十分な時は、「当事者から話を聞く」という方法があります。接客業に就く前に接客業の人から話を聞き、子供を持った人から子育ての苦勞を聞き、リーダーになっている人から人を導く苦しさを聞くのです。そうして、自分の不十分な想像力を補うことが、よりよく生きる方法だと僕は思っています。だからこそ、くじらさんの相談を取り上げさせてもらいました。

くじらさんの相談は、まさに「当事者の話」です。くじらさんの苦勞や苦しみを知っていくことが、「障害のある子を悪意から守る」ための一つの方法だと僕は思っているのです。この相談を読んだ多くの人が、「いじめはそもそも許しがたいのに、障害のある子をいじめるなんてのは、言語道断、絶対に見過ごさない」と思った

り、「なるほど。なるべく障害のある子と一緒に過ごす時間を作ればいいんだ。そして自然に接してみればいいんだ」と思ってもらうことが、この国の多くの人の意識を変えていくことだと思っているのです。名作映画『チョコレートドーナツ』を見る前と後で、ダウン症児に対する意識がまったく変わった知り合いがいます。人は、知ることで変わる可能性があるのです。

どうですか。くじらさん。長い道ですが、少しずつ少しずつ、当事者の思いを伝え、本当の姿を知らせていくことが、ぶつけられる悪意を減らす一歩だと僕は考えているのです。そのためにも、僕自身、作家・演出家として、できることはしようと思っています。くじらさんの子育てを心から応援します。

1、「A【「障害のある娘をどうしたら人々の悪意から守れるのか」(36歳 女性 くじら)】」の内容を、「だ・である」の常体(普通体)を使って200字で要約して下さい。常体でない場合や、字数を大幅に満たさない/超えた場合、減点の対象となるので気をつけて下さい。(20点)

2、「B【鴻上さんの答え】」の内容を、「だ・である」の常体(普通体)を使って200字で要約して下さい。常体でない場合や、字数を大幅に満たさない/超えた場合、減点の対象となるので気をつけて下さい。(20点)

3、Aのくじらさんか、Bの鴻上さんのどちらかに対し、それぞれの内容を踏まえた上で、手紙を書いて下さい。字数、文体は自由ですが、200字以下の場合には減点の対象となるので気をつけて下さい。(40点)

4、なぜ3のような手紙を書いたのか、その理由を説明して下さい(なぜAのくじらさん宛か、Bの鴻上さん宛てなのかも説明して下さい)。字数、文体は自由ですが、100字以下の場合には減点の対象となるので気をつけて下さい。(20点)

※ 注意：1. 考生須在「彌封答案卷」上作答。

2. 本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3. 考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。